

研究ノート

中華民国 80 年の社会

——『少年大頭春的生活週記』の台湾 社会事件編（その1）——

高橋明郎

1 はじめに

台湾のベストセラー作家張大春の『少年大頭春的生活週記』は、新聞連載小説として作品が執筆された民国80年(1991)の台湾社会の動きと並行して話が進行していく。それらの事件について、筆者は国家中央図書館所蔵の『聯合報』マイクロフィルムをもとに、内政編（その1）をすでに示し解説した⁽¹⁾が、今回は社会事件について扱う。

2 空軍パイロット放火事件

兩位飛行官涉嫌縱火要竄放炸彈。

80.6.23~80.6.29 《少年殺人電影》重要新聞⁽²⁾(P.2)

台湾南部の屏東基地所属の空軍パイロット王世勇(28)、魏賓漢(29)2名による爆弾事件は、6月26日付新聞で報じられた。

二人は屏東439部隊所属の空軍大尉(上尉)で、最近半年の間に賭博性ゲームに熱中してかなり負けてしまい4,50万円の借金を抱えていた。その返済のため脅迫を計画、「蝙蝠奇俠」「全遊」「引想」の3ゲーム店や病院を標的に計画書を作って準備して

(1) 高橋明郎：中華民国80年の社会～『少年大頭春的生活週記』の台湾 内政編（その1）
香川大学経済論叢 2001年3月

(2) ×印と年号表記については、(1)論文の注記参照。

いたが、その最初の標的「蝙蝠奇俠」への脅迫で逮捕された。

事件の概要は次の通りである。

二人は一月前、高雄市五福二路にあるゲームセンター「蝙蝠奇俠」に脅迫電話をかけたが本気にされなかったため、警告のため放火することにし、6月17日ゲームセンターのトイレでガソリン缶を爆発させ、電話で、自分たちはヤクザの兄弟で、逃亡費用が必要だと60万円を要求、要求が容れられなければ爆破装置を作動させると脅した。ゲームセンター側は30万円の支払いを提示したが、二人はこの回答に不満で、22日魏賓漢が客を装って入店、手製の時限爆弾を「吃角子老虎」ゲーム機の後ろに仕掛け、21時爆破にセット、その後王世勇と二人で同じ建物3階の「娛樂広場」で「魔術方塊」ゲームをしながら爆発時間を待った。

ところが起爆装置がうまく作動しなかったため、そのまま時間が経過し、23時すぎに「蝙蝠奇俠」の女性店員蔡鳳琴が装置を発見、チーフの柯進福に知らせた。柯進福がこれを取り除けようとしたとき爆発、柯進福は左手親指、中指、薬指を失い、蔡鳳琴も腹を負傷し、二人とも病院へ搬送された。柯進福の方は高雄医大付属病院（高雄醫學院附設醫院）に入院、蔡鳳琴は軽傷であった。

当時電話で、李副支配人が屏東に金を持って来るよう要求されていたが、彼は道路事情に明るくなかったため、不測の事態を心配して出発しておらず、これが二人の犯人を怒らせた。二人はそこで、要求を180万円に引き上げ、受け渡しを24日夜と決めた。

当局の逆探知の結果、この電話が高雄市新興区一帯の公衆電話からかけられたものと判明、警察は警戒範囲を狭めた。その後王世勇と魏賓漢から、24日夜9時新興区錦田路で受け渡しをとの電話があったので警察が配置され、受け渡し現場で二人を逮捕、使用した通話機と80万円を押収した。

犯人の二人は、よくあることではあるが、職場での評判は良く、二人の逮捕に同僚は一様に驚きを示したという。二人は空軍士官学校（官学校）を民国76（1987）年に卒業した同期生であったが、屏東空軍基地では別の部隊に所属していた。二人とも基地長官の覚えも良く、特に魏賓漢の方は酒もマージャンもやらない真面目な人間であった。しかし二人は最近同僚に借金をしており、額は20万円を越えていた。

国家の安全を司る現役軍人の犯罪ということで、社会的にも非難を巻き起こしたが、空軍も対応に苦慮した。二人逮捕の知らせを受けて、25 日午前には謝英徳大隊長が高雄市に急行した。また軍中枢も対応を迫られ、空軍本部と憲兵単位は、パイロットが重大事件に関わったことを重視し、25 日午後係官を新興分局に事情調査のため派遣した。

3 前警察隊長による身代金要求事件

前桃園刑警隊長陳範涉嫌主導綁架勒索案。

80. 6. 30~80. 7. 6 《吳老師沒收「蕎麥皮」》重要新聞(P. 5)

民國 79 (1990) 年 3 月桃園の商業温良謙が誘拐された事件で、刑事警察局偵二隊四組は陳範成刑事局偵查科照相組長 (54) を逮捕した。彼が桃園県警局刑警隊長の任にあった時、株式投資に失敗、その仲介者の知人温良謙を恨んで呂英傑らに指示して温良謙を誘拐して六千萬元を要求し、一千二百萬元を得、そのうち四百萬元を手に入れていた容疑で、当時陳は犯行を否認した。この事件では、既に呂英傑とその妻莊麗花、郭建成とその弟建發、朱耀鵬、陳炳宏、顏有達の 7 名を逮捕していたが、6 月 29 日に共犯呂文虎も逮捕、8 人は罪状を認め、身代金は既に使ってしまったと供述した。

身柄拘束された陳範成以外にも、台北市刑警大隊や桃園警分局の多数の警官も関与していたと見られており、加えて桃園刑警の十数名の捜査員は、被害者温良謙の家族から「物売り」にと渡された百萬元を受け取っていたことも判明、捜査本部が究明に乗り出した。この事件を受けて、莊亭岱警政署長は遺憾の意を表明し、捜査員に徹底究明を指示した。5 で述べるが、当時の台湾では、警察官とは必ずしも公明正大、清廉潔白な印象を持たれた存在ではなかったとはいえ、この事件は警察幹部の犯罪であったため大スキャンダルとなり、6 月 30 日付『聯合報』も一面トップ、写真入りで報じている。

もともとの起りこりは民國 78 (1989) 年陳範成とその妻江雪玉が桃園市の証券会社で二百萬元の株券を購入しようとして許という従業員に金を持ち逃げされたことであ

り、これに対し、陳範成は、許と親しかった温良謙が絡んでいると思い、ヤクザの呂英傑らに指示して誘拐を計画した。温良謙は呂英傑と知り合いで、呂英傑は温良謙が株式市場に投資しているのを知り、当地の警察のボスの了解の下、マージャンに誘い温良謙を台北市石碑に拉致した。呂英傑らは家族に六千萬元を要求したが、家族は桃園警察に通報した。ところが呂英傑は直ちにこれを察知し、その日の午後には温良謙の人差し指を切り取って家族に送り付けたので、温良謙の家人は一千二百萬元を渡すことに同意した。

家族が警察に通報した情報が、あまりにすぐ犯人側に伝わったのに捜査本部は不審を抱き、当時の陳範成刑警隊長が情報を漏らしたのではと疑っていたものであった。

新聞に報道された警察の発表により、前年3月11日発生した温良謙拉致事件の経過をまとめると、次のようなものである。

民國79(1980)年3月11日、温良謙は呂英傑らと4人で桃園市中山路のアパートで博打をしていたが、アパートを出たところを、7、8名の男にバイキング式拳銃2丁で脅され自動車に連れ込まれてそのまま台北市天母のアパートに運ばれ、手錠と足錠をかけられた。その後犯人らは家族に六千萬元を要求した。彼らはその後継続的に温家と金の交渉をしたが、まとまらないのに業を煮やして、4月13日に温良謙の右手人差し指を切り落として温家に送り付けさらに脅迫した。呂英傑はこのとき、温家側で、40日に渡って脅迫電話を受けて犯人と交渉する形を取っていたが、温家が人差し指を受け取った後、一千二百萬元の支払いで合意が成立したため、4月18日台北市重慶北路で金を手に入れた。翌日温良謙は39日ぶりに解放された。

ところが、メディアなどの取材で、事件の初めから警察の動きが鈍かったことが明らかになった。

すなわち、温良謙誘拐後、家族は桃園県警局刑警隊と桃園分局に通報したが、解放後も一向に解決できなかつたため、温良謙は今年四月になって内政部警政署に陳情、その指示で刑事警察局と桃園県警局とで合同捜査本部を設置し、定期的に会議を開いて捜査に当たっていた。また温良謙の父親が郝柏村首相（行政院長）に直訴し、首相から警政署長に指示が下り、署長の意思表示ということになったという報道もある。

ともかく、これによって本格的に捜査に梃子入れがされることになった。警察の事

情聴取に、温良謙は、拘禁されていた場所は桃園から車で 30 分の距離で、一度逃げ出したとき、山の上から大きなビルが見え、いつも救急車の音がしていたと供述したので、警察はそれをもとに当初桃園地区に絞って捜査していたが、どうやら温良謙が覚えていた距離が正確ではなかったらしく、進展が見られなかった。後に、刑事局偵二隊が、犯人が使っていた携帯電話を見つけ、そこから電話の所有者謝正良を捜し出し、この電話が台北市刑大偵七隊捜査員詹永祥の仲介で謝正良が購入したことを突き止めた。詹永祥らは犯人が脅迫をした録音電話の音声に聞き覚えがあることを認めたことから、警察は郭建成が温家に脅迫電話をかけた人間であると断定した。

捜査担当者は続いて、郭建成が通常士林、北投周辺で活動していることから、捜査の焦点をこの地区に絞った。

刑事警察局は、温良謙から何度も事情聴取して、拘束されていた場所の記憶を手繰り、警察のヘリコプターで桃園や台北天母地区で見慣れた風景がないか調査、ようやく天母の監禁場所を特定、そこが共犯の朱耀鵬の住居であることを突き止め、ここに至ってほとんどの共犯者を特定し、直ちに桃園と台北に分かれて行動に移り、一挙に呂英傑らを逮捕した。

温良謙事件が解決し、桃園県刑警のボス陳範成刑警隊長が裏で糸を引いてヤクザに温良謙を狙わせたことが明らかになり、桃園警察のメンバーもこれに関与しているか少なくとも事情は知っていたとの疑いが強まったため、行政側も何らかの態度表明を迫られた。

莊亨岱警政署長は 29 日夜関係者会議を招集、捜査員がもし、桃園証券商人温良謙身代金誘拐事件に警察関係者が関与しているのを発見しても、断固として送検するよう指示した。桃園県刑警隊と桃園分局刑事組のメンバーが温良謙誘拐致事件捜査の過程で温家の提供した百萬元を「捜査経費（办案費用）」として受け取っていたとされる問題も、風紀上問題があれば法により処理することが確認された。これまでえてして揉み消しが有ったり、被害者からの金品受領がなかば慣例化しているといった批判的空氣を察知して、着任して 3 ヶ月に満たない王一飛桃園警察局長は、29 日、陳範成前刑警隊長が身代金誘拐事件に関与したような規律違反があれば、すべて自分で扱い、彼自身も含めて法による処分に従うこと、この事件に関与したのは前隊長一人だけで

はないと見られるが、徹底調査し社会に解決を示す覚悟であることを表明せざるを得なかった。

王一飛局長の言明では、捜査本部の捜査を経て警察幹部が関与していることを発見したが、捜査はそこで停滞せず、むしろ極秘裡に捜査を進めたということである。王局長は、身代金誘拐事件の解決は無論良いことだが、桃園警察にとってはふがいない出来事であり、悲喜半ばしている、しかし風紀を正すため悪人は逐一見つけ出す、と述べた。

また、同局長は捜査経過について、この事件は1年以上未解決で、今年4月被害者家族から陳情があり、これを重視した莊亨岱警政署長は直ちに刑事警察局と桃園県警察局で合同捜査本部を設置するよう指示、盧毓鈞刑事警察局長と王県警局長がともに責任者となり、定期的に捜査会議を開いて状況を検討した。人質（肉票）が監禁されていた場所を割り出すためヘリコプターで空中から視察するなど、人力、物双方を惜しみなく投入した。2ヵ月間少しずつ進展したあと、身代金を受け取った呂英傑夫妻を黒幕と睨み、交友関係を精査し容疑者を割り出していった。身代金要求電話をかけたのが郭建成であることも明らかになった、とまとめた。

この温良謙誘拐事件では、この時点でなお「無鱈」と「玉子（雞蛋）」という仇名の人物が逃走中であつた。警察、検察は29日開いた合同記者会見で、当局は逃亡中の容疑者捕捉に全力を上げると同時に、身代金の分配方法や、他に警察関係者が事件に関与しているかどうかについて既に調査していることを明らかにした。

桃園地検の邢泰釗検事の指揮で、刑事警察局偵二隊四組と桃園警察は28日夜行動を開始、台北と桃園で、呂英傑、莊麗花（42）夫妻、郭建成（34）、郭建発（31）、朱耀鵬（28）、陳炳宏（24）、顔有達（29）らを逮捕、呂文虎も29日逮捕された。彼らに銃を与えたのは逃走中の「無鱈」という人物と見られている。

問題の桃園県警局の陳範成前刑警隊長は、この事件以前から、とかくの噂のある人物だったらしい。この逮捕の報道と同時に、過去2回も問題を起こし、その都度異動があつたことも明らかになり、警察がこの人物の問題を知りながら、それを表面化させないために、恣意的に異動を行ったのではないかという疑いまで生じてきた。

陳範成、52歳は、警官学校専科班33期卒業で、曾て桃園分局の数箇所の派出所の主

管と、大園分局、桃園分局の刑事組長、桃園県警局刑警隊副隊長などを勤め、73(1984)年には澎湖県警局刑警隊長に転出した後、78(1989)年桃園県警察局に戻り刑警隊長となり、80(1991)年6月刑事警察局写真班に転じていた。

彼は、73年度桃園県刑警隊副隊長であった時期に、当時の桃園地検検事高新武が多数の警官を指揮して桃園市和平路の私娼区を封鎖、多くの私娼を調べ、私娼寮(売春宿)の帳簿を調べた際、陳範成は重要な調査対象にリストアップされていた。検察は彼が売春業者と癒着していたと疑っていたが、まもなく澎湖県に転出し、また物証も押さえていなかったことから、うやむやになっていた。しかし、桃園の警察関係者の間では周知のことであつたらしい。

次は前年5月に起こったもので、黄隆豊検事が桃園市和平路の売春街を捜索した際売春業者の帳簿3冊を押収、当時刑警隊長だった陳範成の名前が再び浮上した。その後検察は、彼と売春業者の繋がり、かばいあいを告発する多数の親書を受け取り、2名の検事が彼を重要参考人として、賄賂要求、目こぼしの有無に関して事情聴取した。その後は陳範成は事を起こさなかったが、邢泰釗検事は陳範成が売春業者と癒着した件について立件をあきらめていなかった。

このように疑惑があり、その捜査が進みかけると転勤させられるという事があつたため、この温良謙事件でも、陳範成が捜査進展の時期に桃園警察から「折よく」刑事警察局鑑識課に転任となり写真組組長となったことについて、事件解決前に、彼が事件と関与した可能性があるのを当局がつかんでいたことと関連が有るのではと、改めて意味深長な視線が浴びせられることになった。

加えて市民を呆れさせたのは、これほど問題を起こしていた陳範成が、転任前の6月8日(逮捕のわずか20日前)まで、警察局から成績優秀(績優)職員と評価され公費で海外旅行していたことである。

警察側は、特に彼一人海外に出したわけではないと防戦に追われる。この績優員警の海外観光は桃園県警局主催で、績優員警は各課室と外勤隊の推薦を経て督察室が選考し、全部で60名を決めた。人数が多すぎたため2班に分けることとし、第一陣は5月末出国し、6月8日帰国した。旅行先は東北、または東南アジアで、旅費は県警局が全額補助した。

陳範成は第一陣で、彼は海外旅行帰国から4日で転勤したことになる。王一飛警察局長は、陳範成の転勤は、今回の事件とは無関係だと述べている。しかし、これでは海外逃亡の機会を与え、凶らずも帰国してしまったため今度は桃園警察から転出されたと疑われても仕方のないところであった。実は事件への関与が疑われているもう一人の警察官は、捜査成績が特に優秀だということで績優人員に選ばれ第2陣としてこのとき旅行中で、警察では慌ててこの警官が海外旅行中に消えないよう対応の協議に入る破目になったのである。

陳範成が身代金誘拐事件に巻き込まれたことについて、当時の同僚や部下の反応は、潔白とか濡れ衣とかいうのではなく、彼は実際に手を下すほど馬鹿ではないから、誘拐を教唆しただけなのだろうというものであったらしい。

同じ桃園県警では、呂英傑容疑者と、刑事局の前幹部が知り合いであり、呂が以前この警官をたずねて桃園地検署を訪れ、また呂がこの件と無関係であると保証していたことも捜査本部はつかんだ。しかし刑事局は、この時点での証拠から見ると、この既に退職した幹部は、法を犯していないとしている。

一方台北警察の人間もこの事件への関連を疑われた。それは台北市刑警大隊偵七隊捜査員の詹永祥で、彼は初動捜査の段階では脅迫電話の音声から犯人を確認した「秘密証人」となり解決の一助となったが、やがてこの人物の車と携帯電話が事件に使用されたことも明らかになったのである。

詹永祥の述べるところでは、詹永祥は、前年9月行きつけの喫茶店でコーヒーを飲んでいるとき支配人からの紹介で郭建成と知り合った。郭の話から、彼が多くのヤクザ（黒道）と分派を知っているらしかったので、詹永祥は郭を情報提供者（線民）として利用できるかもしれないと考え何度か郭と会った。ただ郭の話の裏づけを取ると、必ずしも正確でないことから、まだ正式な情報提供者として使う考えはなかった。

詹は、その喫茶店で郭建成とその友人謝正良と会ったことがあり、その話の中で、謝は詹に復興北路及び民権東路口で携帯電話を販売している黄という同級生がいるのを知り、彼に黄を紹介してくれるよう依頼、電話の価格を負けさせた。そこで詹永祥は黄と謝を会わせたが、黄と謝、郭らがどういった相談をしたかは分からないという。のちに黄という友人は、謝正良が携帯を買う約束をしたが支払わないので、電話代は

郭が支払ったと詹永祥に言っている。

ただ彼は疑惑の報道をされたことに対し、次のように反論している。

電話の登記上の名前は謝正良であった。携帯電話が詹永祥のものという報道は事実無根である。2、3ヵ月前郭建成らとこの喫茶店でばったり会い、郭が娘の誕生日なので家に戻りたいと言い、彼から喜美(シボレー?) 16 Vの青のバンを借りた。その晩郭らはバンを返したので、詹永祥は郭らがバンを使い何をしたかは知らないという。

同時に刑事局の対応についても、27日朝に刑事局から、誘拐犯の電話の声を聞くようたのまれたが、その時刑事局の者は彼のシボレーのナンバープレートが抜かれて12 Vの薄緑の中古のシボレーに付けられていたので、犯人は「移花接木(こっそりすりかえる)」というやり方でナンバープレートを犯行に使ったもので、刑事局の捜査に協力してほしいと言われたとしている。

彼は、刑事局が既に把握している電話録音から、温家を脅迫した犯人の口跡が郭建成に他ならないのを指摘し、同時に刑事局に彼の「秘密証人」としての身分を保証するように求めた。捜査当局が、彼が郭を特定した直後に行動を起こして逮捕し、彼の身分を暴露し、そのうえメディアが、彼が携帯電話と車両を犯行グループに提供したなど事実に反する報道をすることは思いもしなかった、と述べている。

この報道で、台北警察も対応を迫られ、29日に、台北市刑警大隊偵七隊捜査員の詹永祥がバンを借りて犯人一味に貸していたとの報を受けた廖兆祥台北市警局長は、梁建銘大隊長と査察(督察)室に直ちに調査を進めるよう指示した。

この事件での以後の捜査の重点は、呂英傑の脅し取った六百万元の身代金の行方、及び他に共犯や背後で糸を引く人物がいるかどうかに移った。

主犯呂英傑は28日逮捕された直後は犯行を否認していたが、先に逮捕されていた郭建成らが既に彼の関与を認めていたため、ついに犯行を認めた。そして温良謙の家人が支払った一千二百萬元のうち六百万円を手に入れたと供述している。

警察がこの金の使途を追求したところ、呂英傑は桃園県の陳範成前刑警隊長に四百萬元渡していたことを認めた。しかし警察では彼以外の警察関係者にも金が流れたのではと疑って更に捜査している。

共犯の顔有達の供述では前年3月11日、彼らは桃園で落ち合ったあと温良謙らが

マージャンをしている場所に車を走らせ、2丁のバイキング式拳銃を持ち温良謙を車に押し込み台北市士林区忠誠路一段の拘禁場所まで運んだ。顔は、彼と「頭（大頭）」という仇名の郭建成が温良謙の家に電話して身代金を要求する役であった。しかし家人が身代金支払いをしぶったため4月13日午後温良謙の右手人差し指を切断し家人に送りつけたとのことである。

なお、この事件はそもそも陳範成夫人の江雪玉が株式投資で温に多額の金を騙されたと恨み、呂英傑らと共に謀したものとする。江雪玉は29日夜温良謙や呂英傑のことは知らないし、一度台橡（台湾ゴム）の株を買ったことがあるだけで、人にも株はやらないほうが良いと勧めているくらいで、うわさは間違っていると述べた。

当時のマスコミはこの警察官の罪状を解説しているが、それによれば、法律上は、脅迫のため人を拉致した者は死刑（懲治盗匪条例第2条第9款）であり、団体官兵と盗賊の捜査の任にある者で、この条例に反した者は例外なく死刑（同第6条）と定められている。この県警隊前隊長が身代金誘拐に関与した事件では懲治盗匪条例が適用されるので、犯罪が立証されれば死刑に処せられる。

検察警察双方の捜査により、もし陳範成が呂英傑を唆して温良謙を誘拐し身代金の一部を受け取っていたと立証されれば、刑法上犯意の連絡ありとされ、共同正犯となる。ただし、単に教唆しただけであれば、刑法の規定で、「教唆犯依其所教唆之罪處罰之（教唆した者は、その教唆した内容の罪で処罰する）」ことになる。

陳範成が誘拐身代金要求の共同正犯であるかもしくは教唆犯であるかは、検察が実際の犯行過程から認定するわけであるが、教唆犯であろうと共犯であろうと、実質的には同じ刑罰を受けることになるとしている。

4 張秉源事件

廿九歳男子張秉源涉嫌持刀殺死雙親，並將屍體棄置於建國北路高架橋停車場。

80.7.14~80.7.20《少年維持的煩惱》重要新聞(P.12)

この両親殺害事件は、状況が単純なため、7月17日には検察は捜査を了え、2件の

殺人について起訴，死刑を求刑することになる。

17日の会見で台北地検の蘇南桓検事は，取り調べ中張秉源はひたすら，速やかな死を求めており，精神鑑定も必要ない，訊問時の供述も筋が通っており，精神異常を示すものはないと述べた。

5 軍・警関係者の犯罪

今回取り上げた3件のうち2件は，軍や警察といった治安維持に当たるべき職業の人間が起こした悪質事件である。この小説には，これ以後もこうした治安機関にからむ事件が登場するが，ここで当時の治安にからむ状況について述べよう。

長く続いた戒嚴令が，蔣経國總統の最後の時期に解除された。町中で市民の動向に神経質に目を光らせた警官たちが消えていくと，治安は急激に悪化していった。戒嚴令時期のものに代わる法整備の遅れもこれに拍車をかけた。

前年の民國79(1980)年，軍人を政権につけるのかという轟々たる非難の中，李登輝總統に指名されて行政院長(首相)に就いた郝柏村は，治安部局である軍生え抜きという出自にはじない果敢さで，俞國華や李煥といった前任者とは一味違った対応をして見せた。特に就任後最初の春節前夜(2月1日)から一斉に強力な犯罪摘発を開始(所謂「春安工作」)，ヤクザ掃滅(「掃黒」)やこれまで未解決だった事件の解決などで，留置所に入り切れないと言われたほど多数の犯罪者を摘発したことは，大きな成果であった。また，賭博や非合法売春などについても精力的に摘発した。

しかしながら，治安関係職員自体の綱紀の緩みは，変わらず存在していた。例えば陳範成の事件に絡んで取り沙汰された，警官の情報の横流しや金品を妄りに受け取ることは，当時の台湾の人々が警察官の行為として日頃よく見聞きし，場合によっては利用したことである。例えば，この『少年大頭春的生活週記』の中でも，ゲームセンターでの暴力沙汰を，日頃そこで湯茶を饗応されている警官が見て見ぬ振りをする場面があるが，それに不満な大頭春に対し父親はそんなことは考えたって始まらないと

(3) 「……警察後來到電動門口看了一下，說沒事沒事。其實在附近這一帶混的都知，那幾個警官經常到菜場去喝茶，和角頭都是好朋友，角頭的小孩出來殺人當然沒事沒事。」(《恐怖的口香糖》15頁)

論すのである。

警察官の不法行為は、賭博・薬物販売・賄賂・文書偽造から窃盗・詐欺に及び、また「心付け」（「辛苦費」「關照費」）としてほしい年数万円から10万円を超えるものを受け取っているのも珍しくなかった。また通常の事件はあまり取り合わずに無視してしまう（所謂「吃案」）とか、警察内の犯罪は表に出さない、特に当時人事は推薦制を取っていたため、ある警官を摘発すると、その人事を推した上役の黒星にもなることから、余計揉み消しに腐心する傾向が生まれた。だから温良謙事件の捜査が進まないと、家族は県警の頭越しに政治家や警察機構中枢の幹部に直訴せざるを得なくなった（こうした場合人脈を紹介してもらったり、取り次いでもらうのに相応の「手数料」「迷惑料」または物品に類するものが必要になる）のだし、事件発覚後は警察幹部が厳正に捜査するとマスコミに強調することになるのである。特にこの事件では、重要容疑者である警察官が、折よく転勤したり海外旅行したりという不自然な経過があり、市民の疑惑は深まるばかりであった。

自殺など、精神的に不安定な警官にまつわる出来事は、小説でも別の箇所が登場するし、別篇に譲るとするが、けちな収賄のようなものはともかく、警官がらみの重大事件は、この年に限っても次々に起こっていた。警官の柳彦龍、馬徳熙、李世淵らがそれぞれ引き起こした事件は、陳範成の事件とともに当時の人々の警察への批判を倍加させた。

前参謀総長である郝柏村行政院長の体面をより損ねたのは、無論警察関係の不祥事よりも軍関係者の不祥事である。軍関係では、この二人のパイロットの事件以外にも、軍関係者とヤクザの繋がり、そこから生じる軍用物資、特に火器の持ち出し、横流しが、この年問題になった。

戒厳令時期に治安面で大きな権力を持った警察、敵国として北京政府を想定して、その南攻を食い止めているとされた軍隊、これらは戒厳令下では不可侵の領域であった。従って、少々の不祥事は揉み消され、ヤクザなど町の有力者との繋がりもやむを得ないとされる部分もあった。しかしそれが解除され、「動員戡亂時期」終結が宣言されると、野党やマスコミの目が厳しく注がれた。郝柏村もヤクザの摘発の先頭に立っているが、警官や軍人とヤクザの繋がり周知であるだけに、舵取りの難しい所であっ

た。

こうした治安上大きな力を持っていた部署が、権力面でも、彼ら自身の綱紀の上でも弱体化をさらけ出すと、それはそのまま町の危険化に繋がりがねず、実際そうした傾向が見えているだけに、政府側は新たな対応を迫られることになり、6月には立法院に「社会秩序維持法」が上程されるに到ったのである。

(接)